

<当館ゆかりの本学教員>

児玉幸多（こだま こうた 1909~2007）



昭和13年（1938）学習院教授、同36年学習院大学文学部史学科教授、その後、学習院女子短期大学学長、学習院大学学長を歴任。

児玉氏は日本近世村落史、交通史を研究し、戦後の近世史研究の礎を築きました。また、学習院女子大学の正門（重要文化財）の移転、学習院大学史料館の設置など、学内の施設・機構整備に尽力しました。

児玉氏の蔵書は、史料館内に児玉文庫として整備されています。受け入れは現在も継続中で、膨大な書籍は研究・教育に活用されています。

『学習院史学』16号より転載

*児玉幸多氏は2007年7月4日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

辻邦生（つじ くにお 1925~1999）

昭和50年（1975）学習院大学文学部フランス文学科教授。

フランス文学者・小説家。

辻氏は非常勤講師なども含めると約35年にわたり、学習院大学で教鞭をとりました。同時に、歴史小説や純文学のほか、映画評、演劇評、エッセイなど様々な作品を残しています。作品の中に自白キャンパスの様子が登場することもありました。また、取材旅行時のスケッチや同僚教授の似顔絵なども多数描いており、その画才もよく知られています。

当館は、辻氏の生前より執筆活動に関わる資料の寄託を受け、整理を進めています。



当館第24回特別展パンフレットより転載

出品資料群名一覧

勸修寺所蔵山階宮家関係史料	旧制学習院歴史地理標本室移管資料
小西四郎収集史料絵双六	辻邦生関係資料
常陸国下館藩家老牧家文書	陸奥国棚倉藩主・華族阿部家資料

協力者一覧（五十音順・敬称略）

阿部正靖 学習院大学史学会 小西晃 筑波常遍 辻佐保子

2007年度 学習院大学史料館常設展 「ヒトと乗りもの」

会期 2007年9月25日（火）～11月30日（金）

編集・発行 学習院大学史料館

発行年月 2007年9月

2007年度 常設展

ヒトと乗りもの

2007.9.25(火)
～11.30(金)

(10.17(水)は開院記念日のため閉室)



平日 12:00～17:00

土曜 10:00～12:00

入場無料

〔特別開室日〕

10/8（月・祝）12:00～17:00

10/27（土） 10:00～17:00

学習院大学史料館

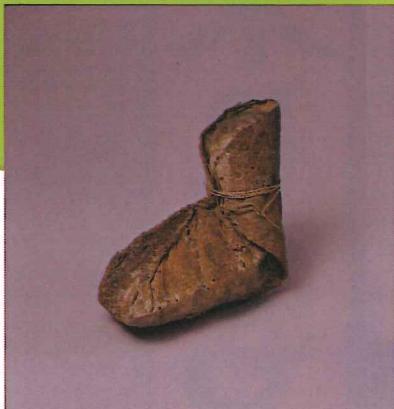
〒171-8588 豊島区目白1-5-1

Tel: 03-3986-0221 (内線:6569)

はじめに

「より速く、より遠く、そして快適に」。人は「移動」について様々な方法を考え出してきました。歩行に適した履物、動物を乗りこなすための道具、動力によって進む船・鉄道・飛行機などの開発。人と乗りものの関係は、創造・発明の歴史といつてもよいでしょう。

本展覧会では、社会と文化の発展に深く関わるヒトと乗りものについて、当館の多様な資料から考えてみようという試みです。また、「ヒトと乗りもの」にちなんだ本学教員の資料も合わせて展示いたします。本展覧会のテーマとともに、本学教員の教育・研究への情熱もあわせて感じていただきたいと思います。



「鮭皮靴」(アイヌ関係資料)

(旧制学習院歴史地理標本室移管資料)

1. 踏み出す一歩

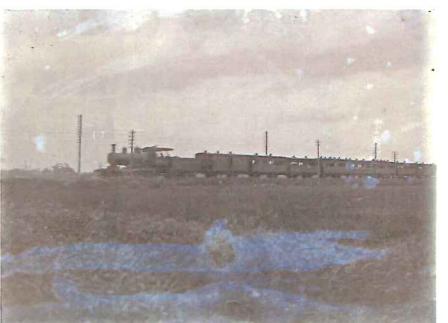
人の移動の第一手段は徒歩です。肉体的・地理的に徒歩で移動できる範囲には限りがあるため、人は履物に工夫を凝らしました。

足を守るための道具として、イグサや竹の皮などで編んで作られた草履、草履の裏に獸の皮をはって表に水気がしみこまないようにした雪駄など、それぞれの機能や気候風土に応じた様々な履物が発明されます。

こうして人びとは自らの力で未知の世界へ一步を踏み出し、その広大さを知ったのです。

3. 線路がつなぐ旅の夢

明治5年(1872)9月、日本最初の鉄道が新橋一横浜間で開業しました。その後、鉄道網の発達は日本の工業化を促し、人びとの生活に大きな影響を与えることになります。鉄道により可能となった貨物の大量輸送は従来の輸送方法や産業を変化させ、また各種の時刻表や旅行案内書の発行は、鉄道による参詣客誘致の点で寺社と鉄道会社との結びつきを深くしました。鉄道沿線に登場する新しい名物や、列車に乗ること自体も大きな楽しみとなりました。

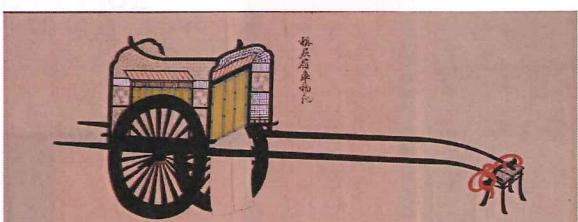


「汽車、明治四十二年夏於大森」

(勧修寺所蔵山階宮家史料)

2. 牛馬の背に揺られ

今日、牛馬は私たちの生活から縁遠い動物となりましたが、かつては交通運輸の手段として、たいへん身近な存在でした。牛馬は人を乗せ、荷物を運び、車を引く家畜として大切にされました。特に馬は、狩・戦争・旅などの用途に応じて、スピード・持久力といったそれぞれの長所を活かした品種改良が行われ、蹄鉄などの馬具も開発されました。動力が発明される以前、馬は「最速の乗りもの」として、人とともに地上を駆け巡っていました。



飛鳥井本「九条家車図」

(学習院大学史料館所蔵史料)



「台湾竹筏模型」

(旧制学習院歴史地理標本室移管資料)

4. 船上の愉しみ

船による海外との交流は古代よりみられ、河川交通でも船は大きな役割を果していました。江戸時代には海外との交流が制限され、大型船の建造は禁止されていましたが、明治以降は日本も海外定期航路を開設していきます。

日清戦争後、日本は本格的に遠洋航路に進出し、明治29年(1896)には欧州航路、北米航路、オーストラリア航路が開設されました。これら海外航路には、商用での往来、海外出張の役人、留学生、移民など様々な人びとが乗船していました。



「山階宮御所蔵映画」の1シーン

(勧修寺所蔵山階宮家史料)

5. 憧れの空中旅行

鳥のように大空を自由に飛びたいという人類の夢は、1903年、ライト兄弟の飛行実験の成功により叶えられます。そして7年後、日本でも初めて飛行機が代々木練兵場を飛び立ちました。

第一次世界大戦で飛行機の威力が認識されると、各国では航空技術の向上が競って行なわれます。日本でも明治44年(1911)には陸軍で会式1号機が完成し、1920年代半ばには軍用機の大部分で国産機が使用されました。

大正11年(1922)には、大阪—高松・徳島間で郵便・小荷物の航空郵送が始まります。その後も各地で定期便が開設され、路線は朝鮮・満州にまで延びていきました。